

# 人文研将来計画について

同志社大学人文科学研究所

所長 小 山 隆

今日の3人の方々のお話も、ある種の振り返りを含めた提言でもありました。本井先生からは「CSを人文研の柱に」。心意気として「啓明館を同志社的な研究センターに」というお話がありました。これは吉田先生、木原先生、林先生に宿題として渡してしまおうかと思います（笑）。CSだけが、ということではないと思いますので、CSが一つの重要な柱として、というメッセージとして、ありがたいご指摘だと思っています。本井先生からは「同志社150年史」にCSが積極的に関与するように、というメッセージをいただきました。これを受けて吉田先生から「学内センター、機関と棲み分けながらも人文研が発展できることがあるはずだ」と。これは大事だろうと思います。一つは今の時代、棲み分けを明確にしながら人文研が貢献することを大事にしたいということを学ばせていただきました。

高久先生のお話は、いい意味で、ほんとの昔話というか、「やれといわれたから天皇制の研究をやった」とか、昔は6年で1単位の研究だった。「40回やったけど失敗だったよ」という、たとえ話もありました。昔、許されていた研究のあり方で今は、それがなかなか許されなくなっている。しかし昔話を大切にしていきたいなど。それは最後のお二人の松久先生、浅倉先生の主張ともつながってくるのではないかと感じました。

小林先生からは「理論的な、思想的なものが先に答えがあるのではなく、一次資料を通しての研究、実はそれが一つの大切なものであり、人文研は、その先駆けにもなっている」といつていただき、誇らしい思いがして資料を大事にしていこうと思いました。

松久先生からは前半、部門研究について資料を示していただき、学問していただいたような感じがしました。「現代社会研究」のカテゴリーを対象化することはアリなんだと面白く思いました。繰り返し伝えていただいたのが「長い目で育てること、そこに資金を」と。長期的に資金も含めて、お二人がコラボして強調されました。それに対して今、外部資金を取得する研究が優先されることに対する戸惑いの的なものもおっしゃったと思います。全く同意します。ただなかなか、それがほぼ認められない状態で、あえて同意しているということです。学内でそれを通すには、いかに上手にしていくなか、個人的には「外部資金は前提ではない」と思っていますが、それは通りませんので「外部資金へのチャレンジは前提にしていきたい」とお願いはしております。気持ち的に同意し、落としどころ探しが研究所長の役割になるのかなと思います。メッセージとして「長い目で見えるべきではないか」は100%同意します。そのメッセージを可能な限り、受け止めていきたいと思います。

浅倉先生からは「外部の共同研究者を大切に支えるように」と。このことは全く同意です。共同研究を一つのウリとしていくためにも大事なことだと思っています。

昨年度、研究所長になった時、前からの宿題として「将来計画

を立てなさい」と。結論的には本文9ページ（要約版で3ページ）の報告書をつくりました。執行部にお認めいただき、現在、この将来計画で進んでいます。人文研が果たしてきた役割、いい意味での自己主張のつもりです。それに対して課題や、ある種、批判もされている。説明責任が求められている。それに対して「将来への提言」として、ある種の回答をしたいと思いました。温故知新で何かを捨てて新しいものをつくっていかうということではなく、70年前、50年前、30年前をしっかりと守っていく形で将来計画を再構築したいと。一部、みなさんにはご不満が残るところがあるかも知れませんが、基本的には守りたいと思っています。

人文研が果たしてきた役割と課題と提言。一つは「キリスト教社会問題研究」「京都を始めとする近現代日本の地域研究」「現代社会研究」の分野に、ある程度、重点化した体制をつくりたいことをベースにしました。20年前、40年前、表現は「現代社会」といわずに「資本主義研究」といったりしていましたが、共通に貫かれているものだろうと。新しいものではなく、昔からこういう分野があったと感じています。「部門研究会」は、ここに特に重点化する、常設化する、いろんなことを書いていますが、まだ決まっていません。次期、21期の部門研究に向けて、あと1年、2年かけて考えていきたいと思っています。もちろん先の3つ以外を排除するつもりはありませんので自由に、さまざまなものを応募していただく形にしたいと思っています。

第2の提言として「学際的な共同研究拠点としての役割を一層強化する」。部門研究が、時代、時代で一気に増えています、

条件を緩めてきた面もあります。「学際」に焦点をあてていく、「参加学部が跨がっていることを求める」とか、個人研究ではできないものを条件にする形で、答えにできたらという気がしています。細かくは3～7まで具体的なことが書かれていますので省略します。

資料蒐集、蓄積については、1952年に部門がつくられています。また報告の中にも「いただいた資金を通して買いあさった」という話もありましたが、それは財産だと思っています。ぜひコレクションを充実させるシステムをつくりたいと思います。先生方とご相談し、蒐集をシステム化していく委員会を設置する形で重点的な蒐集をすることをしていきたいとお約束したいと思っています。

「専任研究員制度」は去年の段階では5名定員が実員1名でした。今年、林先生にきていただき、来年、もう1名の採用ができました。3分野に対して3名になりました。まずは教員を増やしていくこと、場合によっては教学への貢献を考えたい。キリスト教科目、同志社科目で、学部の授業をもつのではなく、研究成果を全学提供科目に出していただく、それを義務にするわけではなく、研究成果を学生にも発信していくシステムをつくっていかれたらどうか。等々、他にもありますが、あとはお読みいただきまして、またご意見をいただけたらありがたいと思っています。